新刊紹介

想像を膨らまさば絵巻物のような本

『北京を知るための52章』

櫻井澄夫・人見豊・森田憲司　編著

明石書店
2160円（税込）

朝　浩之（会員）

国名または地域名や都市名を書名に含む「エリア・スタディーズ」というシリーズが明石書店から刊行されている。中国関係も多数ラインアップされており、ここ2年内に刊行されたものとしては『現代中国を知るための44章（第5版）』（藤野彰・曽根康雄 編著、2016年12月）、『台湾を知るための60章』（赤松美和子・若松大祐 編著、2016年8月）が挙げられる。この両書を比較しながら読むと、中国と台湾の国際的立ち位置の違いを容易につかむことができる。いずれも刊行後早い時期に増刷になっているようだ。

その他、『香港を知るための60章』（吉川雅之・倉田徹 編著、2016年3月）、『内モンゴルを知るための60章』（ボルジギン・ブレンサイン 編著／赤坂恒明 編集協力、2016年3月）、『中国のムスリムを知るための60章』（中国ムスリム研究会 編、2012年8月）、『現代台湾を知るための60章（第2版）』（亜洲奈みづほ 著、2012年1月）、『中国の歴史を知るための60章』（並木頼寿・杉山文彦 編著、2011年1月）なども版元公式サイトを見ると入手できるとなっている。

本稿では中国関係の中の最新刊『北京を知るための52章』を紹介したい。

クレジットカード会社に勤務し10年にわたって北京に駐在した櫻井澄夫。ミュージシャン、ザ・タイガースのドラマー、人見豊。東洋史専攻、奈良大学名誉教授の森田憲司。以上、異色の組み合わせといえる3名を編者に据える。編者も含め、大学、報道、民間企業、公的機関、料理店、京劇などに携わる多彩な30名の執筆者が、写真・図版150点近くを添えて物語る。というと、果たしてどのような書なのかといぶかることにもなろうが、ここは編者に語ってもらおう。「本書は単なる寄せ集めのアンソロジーではなく、北京や中国との編者や執筆者の深い関わりや、本書の作成のために集まった集団としての執筆者や支援者の皆さんとの長期にわたる親密な関係があってこそ実現した著作物である」（あとがき）という自信作なのである。

それではと、本書の面白さの一端に触れてみよう。まず全体的な印象を記すことにする。においにあふれる本だと感じた。ときに料理のにおい、ときに無機物である建造物、本のにおい

までといろいろだが、根本をたどればすべて暮らしのにおい、人のにおいであり、北京のにおいに帰着する。旅行者としてではなく、北京に居ついた、居ついたかのようにふるまえる、個性豊かな人たちを介しての北京、北京の人々のにおいである。本書の面白さはそうした個性ある執筆者を組織し、しかも統一感をもった一書をなしたということによるのだと思う。

もう一つ。多くの文に、広い意味で書誌学を想起させるような叙述が組み込まれている。この点も面白さという点で見逃しがたい。日常的に見える現在の北京に言及するのはもちろん、日常的には見えない過去の北京をたぐり寄せようと古い時代の文献を丹念に渉猟しているのだ。古き時代の北京を訪ねた当時の日本人が、北京をどのように見たのかを知ることは、現代を生きる私たちの北京への関心をふくらませてくれる。

コラムの「明治の北京紀行を読む」や「古写真について」には、国立国会図書館デジタルコレクションなどのアーカイブが紹介されている。アーカイブにアクセスすれば、居ながらにして、パソコン画面で戦前期の写真を見たり本を読んだりできるのである。古人の訪中記を読んで面白がる読者は少ないかもしれないが、古地図を見たり、観光名所の古写真と現況を比較対照できたりすることには、多少とも北京を知る読者であれば興味津々となるはずだ。本にして本ならず、写真・図版が多数の本と、さらにパソコンが一体となって、絵巻物のように楽しめる。筆者が紹介文を書き出すのにずいぶんと時間を要したのも、本来の読書と離れて、本を読みながら、かつパソコン画面を見ながら読み進めたためだ。

書誌学と言いだしたので小難しくなったように思われるかもしれないが、そんなことはない。要は先人の遺産を理解した上での語り口が、読ませる文になっているということである。これは故宮とその歴史を語る「明代の北京城」「紫禁城」「天安門クロニクル」「北京の環状鉄路と地下鉄」の章が、4人の執筆者それぞれ異なる立場から語っているにもかかわらず、奇しくも多角的な視点をもって故宮を解き明かすことに結実していることにも表れている。

「V食文化」の各章は史蹟また博物館を語る章とともに旅行ガイド的な色彩が強くなるところだが、そうはならず、却って本書らしさを浮かび上がらせている。旅行ガイドであれば誰もが受け容れやすい記述に徹しがちになるが、そんなことはお構いなし。料理に至っては各人各様の主張がぶつかり合ったりもする。一見すると、「迷」（ファン）となった北京について好き放題に語っているだけのように見えるが、各人の語り口が一書としての完成度を押し上げている。見事な〝編〟書だと思う。

日中関係は経済的・政治的には改善の兆しは見えつつあるのかもしれない。しかしながら、世の反中・嫌中感は未だ解消したとは言えない状況にある。経済的な地位の逆転、それと相俟ってのナショナリズムの高まりが起因するのであろう。しかし立ち止まってみようではないか。隣家とは好き嫌いは別にして関係をもたなければならないし、願わくは良好な関係を目指すことに異論は出ようもない。であれば、隣国である中国とも良好な関係を保たなければならない。聴く耳もたず、相手を知ることに関心を失うことが恐ろしい。だからこそ、「北京に対する日本人を中心にした執筆者の『愛市無罪』『良心の書』」（「あとがき」）が多くの読者を得ることを願ってやまない。

本書の出自については「まえがき」に詳しいが、「あとがき」に私の名が挙がっているのは、その出自の頃、本書の企画に惹かれて編集者として関わろうとしたことによる。私が責任を負うべき事情によって投げ出してしまったので忸怩たる思いにあるが、刊行が実現し、紹介する機会を得たことを喜んでいる。